

創価大学・東京富士美術館所蔵 ゲーテ自筆・自署書簡について（2）

田中 亮平

3. アウグスト宛書簡（つづき）

前号に続き子息アウグスト宛の8通の書簡のうち、残りの2通の全文翻訳をおこない、解説を付す。

⑦ 1822年8月13日、エーガー発

「エーガー市、1822年8月13日

昨日、お前のイエーナとヴァイマルからの手紙と一緒に届いたが、格別に嬉しい思いだった。というのも、今日はヴンジーデルから2時間のところにあるバイエルンのレトヴィッツに招待されて出かけるからだ。その地には注目に値する非常に重要な化学工場があるのだ。私は18日に戻り、今月末にお前たちのもとに帰れるよう、ただちに出発の準備にとりかかる。これを受け取ったら、もうお前の方で手紙を書いたり送ったりするには及ばない。

同封したものをバウマンが喜んでくれるといいが、お前がその他にイエーナで喜ばれるとして挙げたものを、とりいそぎ指示しておこう。

万事よろしく、ごきげんよう。

草々

G 』

全文ゲーテの自筆書簡。データベースでは手稿は所在不明となっていて、やはりヘンケル・ドナースマルク家寄託文書の情報が追記されている。1907年のヴァイマル版が初出で、1974年のシュタールガルトのカタログでの部分紹介に先だち、1949年ベルリンのオークション会社ゲルト・ローゼンのカタログにも一部分が印刷されているとある。ローゼン社のカタログはハイデルベルク大学図書館のサイトでも確認できる。

手紙が書かれたエーガーは現在はチェコ領のヘプで、カールスバート（カルロヴィ・ヴァリ）やマリーエンバート（マリアーンスケ・ラーズニェ）などの湯治場への入り口にあたり、ゲーテも幾度か滞在した。特に1820年に知己となったヨーゼフ・ゼバスティアン・グリューナー（1780-1864）はエーガーの法律家で警察官吏であり、かねてよりゲーテの崇拝者でもあった。ゲー

テは1823年まで毎年湯治の際にグリュナーを訪問し宿泊もしている。グリュナーは1825年にヴァイマルにゲーテを訪ねているが、その後も2人の文通はゲーテの死の年まで定期的に続いた。この手紙が書かれた1822年にはゲーテは7月下旬から8月下旬のおよそひと月エーガーに滞在しており、その間にグリュナーと連れ立って近郊の地域に遠出をしている。

レトヴィッツ（今日のマルクトレトヴィッツ）への小旅行もその1つで、クネーベル宛の同月22日付けの書簡にはより詳しい報告がある。それによれば、この町はこの時期バイエルン王家の領地になって間もないころで、工場経営の機運が高く、ゲーテを招待した工場主は大規模に昇華物や酒石酸を製造していた。またその息子が経営するガラス工場の規模の大きさはゲーテを驚嘆させている。

⑧ 1823年8月24日、エーガー発

「エーガー、1823年8月24日

今晚来るはずの善良なるマイヤー顧問官に託して、ボヘミア滞在での最後の手紙を送る。この素晴らしい友にとって、かくも短い湯治滞在では大した効果が期待できないのは仕方がない。しかし彼が書いているところでは、カールスバートが多くのことを進捗させる助けになってくれて、新たな希望がよみがえってきたとのことだ。私もお前たちが私をここへ追い立ててくれたことに重々感謝しなければならない。この8週間の自由で陽気で社交的な生活がいかに私を回復させたか、とても言葉では表わせないほどだ。ある種の感じやすさだけが残っているが、初めてそれを意識したのは音楽を聴いていたときだ。ミルター（歌手）とシマノフスカ（ピアニスト）の2人でなければ、私をこのような気持ちにさせることは決してなかったはずだ。しかし、これが意識にのぼった以上、その影響は避けられまい。あしたカールスバートに行って、私の中のこれらの印象も更新するつもりだ。その後はハルテンベルクにアウアースペルク伯爵を訪ね、それからエーガーに戻る。前に伝えたように9月13日の土曜にはイェーナに帰りつけるように馬車をよこしてくれ。しかしもし何日か戻るのが遅れても心配には及ばない。ひょっとすればヴンジーデルに寄ったり、レトヴィッツやコンラーツロイトを訪ねるかもしれないので、そうなれば帰りが遅れることになる。

グリュナー顧問官は彼の鉱物学と地質学の研究を信じがたいほどの働きで進捗させている。彼はこの2年岩石学を打ち込んで研究したので、もうすぐすべての芸術家仲間から尊敬される存在になるだろう。それに彼は同時に交易業も始めたので、陳列室は目立って豊かになったし、送付物はフランツェンブルン鉱泉水の甕運搬のついでに輸送できるので、わずかな費用で済んでいる。

そのほかじつに様々なことを日記で読めるだろうが、会って話すべきこともたくさんある。

レーバインにはその充実した内容の著作に感謝している、もうじき彼と再会して語り合うのが楽しみだ。

当初はお前に小さな白鳥の形の鉱物を送ろうと思ったが、それはほかの荷と一緒に着くこ

とになりそうだ。しかしひとまとまりの紅柱石を手紙といっしょにお前に送らずにはいられない、おそらくアンダルシア人でも自慢できないほどのものだ。もっと素晴らしい鉱石類も持ち帰ることができるだろう。

レーバインの花嫁のマイアー嬢も来ている。とてもきれいで心根もよく、皆に尊敬される女性だ。グリーンナー顧問官も彼女には太鼓判を押しているし、この縁組を喜んでいる。この6週間というもの毎日この人を目にして確信したのは、彼女が非の打ちどころのないふるまいを心得ている人だということだ。

ところでここでイェーナでの我々の食事会のことについても触れておこう。その件で私に代わってお前からフォン・リェンカー夫妻に挨拶してもらえると都合がいいのだが。思うに昼食会は彼らのところとするほうが、先方にとってむしろ望ましいだろうし、極めて自然でもある。わたしも目下の心境ではそれで満足だ、帰り着いてすぐにまた世捨て人暮らしに陥ることは避けたいので。

マイアーが来た、では終わりにしよう、ごきげんよう。

エーガー 1823年8月24日

G]

データベースによれば書記ヨーンが筆記したものにゲーテ自筆の訂正が加えられている、頭文字の署名もゲーテの自筆だが、発地と日付は書記による。原本の所在は不明となっている。この手紙とともに1823年8月6日から19日までの日記（ヨーン筆）が同送された。この手紙の一部は1900年の『ゲーテ協会年鑑』第15巻に掲載されたが、全編の掲載は1906年のヴァイマル版ゲーテ全集書簡編の第37巻が初出である。

ゲーテはこの手紙の前にボヘミア（現在のチェコ）の温泉地マリーエンバート（マリアンスケ・ラーズニェ）に滞在していた。有名なゲーテ最後の恋の舞台となったところである。相手はこの時19歳のウルリーケ・フォン・レーヴェツォーという貴族の娘で、母親を含め家族ぐるみで大詩人ゲーテとの交際を喜んでいた。ゲーテは1821年からこの年まで、毎年夏になると一家と再会していたが、次第にウルリーケへの恋情が募っていった。主君のアウグスト大公も湯治に来ていて、ゲーテは大公を通じてレーヴェツォー夫人に娘との結婚の意志を伝えてもらった。彼は7年前に妻に先立たれていたが、息子アウグストと嫁はゲーテの再婚には反対だった。このことを推察してか、ウルリーケが74歳の大詩人の申し出を受けることはなかった。

この手紙の時点ではレーヴェツォー家はすでに別の保養地のカールスバートに移っていた。手紙にある通りゲーテもこの翌日の8月25日にその地へ向かい、28日の自身の誕生日を祝ってもらうなど、ウルリーケとの日々を楽しく過ごした。しかし、9月5日には別れを告げてカールスバートをあとにする。この手紙はしたがって、激しい情熱の渦中にある中で書かれたものであり、ゲーテの心情も含めた当時の事情を伝える極めて重要な資料である。

この時のウルリーケ体験からゲーテ晩年の抒情詩中の傑作とされる『情熱の三部曲』が生まれた。「ヴェルテルに」「悲歌」「なごみ」という独立した3つの詩をまとめたものだが、成立順は逆で、

最後に置かれた「なごみ」の詩が一番早い。中核をなす「悲歌」はウルリーケと別れた直後の旅路で作られ、9月17日のヴァイマル帰着時にはすでに完成していた。その第一連ではカールスバートに到着する直前、即ちこの手紙の翌日の心情が歌われている。「再び訪れた出会い だがこれは何を意味するのか / 今日まだ花開かぬこのつぼみに何を期待すべきか / 眼の前に開かれるのは天国なのか それとも奈落か / 胸は狂おしくうずき 心は千々に乱れる…」(内藤道雄訳)。

文中には2人の音楽家によって心を揺さぶられた経験のことも語られている。声楽家のアンナ・パウリーネ・ミルダー（1784-1838）とピアニストのマリア・シマノフスカ（1789-1831）である。ミルダーはこの手紙ではミルターと表記されている。ミルダーはベルリンで人気を博したオペラ歌手で、マリーエンバートでこの月の13日と17日にゲーテを訪問している。15日に少人数の集まりの席で彼女は4曲を歌ったが、それを聞いたゲーテは深い感動に襲われ落涙を禁じえなかった。

一方シマノフスカ夫人は、当時人気を博したピアニストであり作曲家でもあったが、やはりこの月の14日、16日および18日にマリーエンバートで、また9月4日にはカールスバートでゲーテに会っている。ゲーテは心の落ち着きを欠いていた状況のなかで、彼女の音楽から深い感動と慰めを見出した。8月のマリーエンバート滞在時にゲーテは彼女に宛てた詩を書いているが、これがのちに上記の「なごみ」と題された詩になった。

2人の女性音楽家との交流はその後も続いた。ゲーテの作品にグルックが作曲したオペラ『タウリスのイフィゲーニエ』の主演をミルダーがベルリンの舞台で歌ったことがあった。その際に、ゲーテは原作の本に4行の詩を書き入れて彼女に贈った。一方シマノフスカはこの手紙と同じ年の10月末から11月初めにかけて2週間ヴァイマルに滞在し、その間毎日ゲーテを訪ねて食事を共にし、演奏を聞かせた。

レーバインはヴァイマルの宮廷医で、1818年以来ゲーテのホームドクターでもあったヴィルヘルム・レーバイン（1776-1825）のことで、ヴァイマル大公の侍医も務めていた。ゲーテは彼に尊敬と信頼と友情を抱いており、2度にわたってカールスバート行を共にしたこともあった。ゲーテの病気の治療にもあたったが、その妻クリスティアーネの臨終を看取ったのもレーバインであった。彼はこの手紙の2年後に亡くなったが、ゲーテはその死を深く悲しんだ。

最後にフォン・リュンカーはカール・ヴィルヘルム・フリードリヒ・フォン・リュンカー男爵（1767-1843）のことで、この人はすでに少年時代にヴァイマル宮廷の小姓を務め、のちに法律家、将校を経てイェーナの郡長を務めた。晩年に『アマーリエとカール・アウグスト時代のヴァイマル宮廷にて』という回顧録を残しているが、若くして宮廷に新風を吹き込んだゲーテとそれを快しとしない守旧派貴族間の対立の時代などの記述も含まれている。自らの見聞をもとに、全体に中立的で冷静な描写でつづられているとされる。

4. ヨーゼフ・シュタニスラウス・ツァウパー宛書簡

1822年12月27日、ヴァイマル発

「尊貴なる閣下

大公殿下の随員を勤めている侍従長ボイルヴィッツが、私に代わってご覧の書簡を閣下にお渡しし、あわせて私からのねんごろなご挨拶をお伝えすることでしょう。もとより閣下は私の依頼がなくとも、この有為な男がそちらの地で願うことすべてにお力添えをいただけることでありましょう。学事長様にもくれぐれもよろしくお伝えください。この友が戻りましたら、同様に閣下のご健勝ぶりをわたしに伝えてくれるものと思います。

プラハからの詳細で愛すべきお手紙は遅滞なく無事に届きました、心から御礼申し上げます。

敬具

ヴァイマル、1822年12月27日 J. W. v. ゲーテ 』

データベースによれば書記ヨーンが本文と発地・日付を書き、ゲーテが署名したとある。ヨーンによる下書きはゲーテ＝シラー文書館に保管されているが、原本そのものの所在は不明とされている。初出は1907年のヴァイマル版であるが、それは写しによったものとある。2つ折りの4頁からなっているが、記載があるのは最初の頁のみで、そこにはカール・アウグスト大公の肖像のすかしが入っており、公的な書状であることがわかる。

名宛人のヨーゼフ・スタニスラウス・ツァウパー（1784-1850）は文献学者であり、ボヘミア（現在のチェコ）のピルゼン（プルゼニ）のギムナジウムの教師で、詩学・修辞学を担当した。彼は前年の3月にゲーテの詩に基づいた詩学の書物を送り、ゲーテの賛同を得た。引き続きこの年と翌年にもゲーテに関する著作を送っている。2人はこの手紙の前年から3年連続して夏にマリーエンバートで会っている。

フリードリヒ・アウグスト・フォン・ボイルヴィッツ（1785-1871）は、ヴァイマル大公国の高位の軍人、枢密顧問官、侍従長などを歴任し、大公の厚い信頼を得ていた。ゲーテとは1809年以降、公私にわたる親交を結び、3年続けてマリーエンバートでも滞在を共にしている。1828年、大公カール・アウグストが旅先で死去したが、それを当時ドルンブルク城に滞在していたゲーテに手紙で知らせたのがボイルヴィッツであった。これに対してゲーテが彼宛てに書いた長文の返信は、文化的な側面から亡き大公の業績を論じており、城にちなんで「ドルンブルク書簡」と呼ばれている。

5. 東京富士美術館所蔵の書簡

東京富士美術館は東京都八王子市の創価大学キャンパスに隣接する形で、1983年に開館した。その館蔵品の中には自筆書簡類も所蔵されており、創価大学での展示をきっかけに改めて確認したところ、ゲーテ関連の文書も2通所蔵されていることが伝えられた。そのうちの1通はゲーテの署名はあるが、管轄部署の年次会計に関する公務文書なので、ここでは詳述せず、もう1通に

ついて翻訳と解説を付すにとどめる。

1803年7月26日、ヴァイマル発

「あいにくその戯曲は目下私の手元にはありません、戻ってきたら喜んでお役に立てましよう。私へのあなたの旺盛なご関心は私を大変喜ばせましたので、お互いを一層よく知りあって、それが減じることがないように切に願っております。

ご健勝を心からお祈りしつつ、真実なる尊敬をこめて署名いたします。

敬具

ヴァイマル、1803年7月26日

あなたの忠実なるしもべ

ゲーテ 』

データベースによれば本文、署名、日付、発地ともすべてゲーテの直筆である。原本は所在不明とある。ヴァイマル版の注釈を見ると、エルンスト・エルスターの論文（1885）によれば、手紙の左側に破り取られた跡があり、現存のものは手紙の後半部分ではないかとされている。エルスターの論文の末尾に手紙本文が掲載されており、これが初出である。

名宛人のヤーコプ・アンドレアス・コンラート・レーヴェツォー（1770-1835）は、この当時ベルリンのギムナジウムで教師をしていた。考古学的な著作が多いが文学的なものも書いている。この年の5月にゲーテは『ネボティアン』と題する作品をシラーに送り、評価を頼んでいるが、書簡の中で言及されている「戯曲」はこれを指すとされている。